年中行事歌合

へ4
1408

門 へ 刹 4
號 1.4d8
巻

年中行事五十番和歌巻第一　判者権中納言為秀卿

一番

左　四方拝　女房

をさまれる君のかしこき跡とめて雲のうへにも
ひさしきのみちをまもるてふきさらきのそら

右　供屠蘇白散　権中納言

此まふる人のちとせもくみてしる
わかみちをくらいきてこのたのしみ

判者権中納言藤原朝臣為秀申云

たゞ哥はいとやすらかにやはらかのさまにきこえたると
いふべきと思ふ人のまなびにはさだむべき也
乃哥合乃例にまで海輪にしたがふならひ也
ことに次第の種々なる古の哥も弟子によりえつ
こえんと傳ふるものはうたの道をさだむる人の哥
かならずあるべき事にてもおほく世にしられたり
さめしの神なれ
抑此哥乃道は周楚乃むかしをいひてあめつちも
えらび家の清濁乃さしもわけたるや今まで哥唯
さ川乃ながれにおもむきて神のこゝろにかなふのみの神

の人みなこゝろにあまりてうたをよみたりけるに
花鳥風月雪にそへておもひをのべ心の
おもふ事をのぶる哥は日月のごとく日にあらたまりつくる
まことの花月風雨にふれてめでしくるゝなんでん
乃哥乃花よりよみて人をこひ御國乃あさされ
紫式部らもつくりてひとひをのぶるもそのかたの
時ふのうたのあまたおもかげもたいらしく花乃くれ
たひし詠もんもあつらにあやうあるべき人も
新中納言定家卿につき事も詠ふなのちうらの
ふみ次第の詠たちを哥にさとあられまし

徳きを行ふ船ろべし君臣乃道父子乃義もまた
ひかあしくはまいふらまかや行ふまや守りこともし
あきまつりあかへきすまいごとの大事ひとくる
まそれ判乃くうくるまれ々ちひとまてらて公務
乃あらきを海井裁もあくし童蒙乃ためかめ紙宗
ひらくんとあめいへらめ船く女をれんそうしと云る
ゆかし行るや
に寿宝方あとうふ年へ天子をてしに方とまつ
あとうふおともと行ふまや元正乃寅のときをえらべ
らきの其聖紙と船べて絶宝守山乃るあくまする武

にかへ詩のくく年策紙も以て捏紙も祈つけり
さ海ゆく行ふまや時まさいあくしまあとまて
足く次寛元年二年字多乃みんとの御記り
義ら神あかれとも経んきやうと見て次望極天
皇あ紙移まく宝方をも行ひ夕くて日
東花よ而神くとうれるとやとらしめとひ色りん指月
くこむりしいとあさ海乃人殿上乃綱常あとも日
ちうそへいさいあをてみきや今ハ内裏仙洞摂つ大臣
あとのかうハさ海ふとしもたなれあり頌文もと指く
行まことをし神まうくハあくるてはようれいうかわこと

とかくみる年[illegible]の初[illegible]元命星で先

七種[illegible]

そ[illegible]白散[illegible]

きく[illegible]のはじめに[illegible]散[illegible]

あ[illegible]童女[illegible]

これも屠蘇を小児[illegible]

[illegible]

その[illegible]

屠蘇白散乃[illegible]弘仁年中にはじめ[illegible]三十

目のあ[illegible]小女乃[illegible]

せち[illegible]一献すり先

屠蘇を酒に入て[illegible]

入て配膳[illegible]一日八[illegible]二

日[illegible]三日[illegible]梅二献すり

神明白散を[illegible]三献に度障散と[illegible]

朔乃[illegible]記すいそく

屠蘇酒昔人居草菴除夕遺里人薬令衣嚢

浸井中元日取氷置酒樽名屠蘇飲之不病云々

二番

左　小朝拝　内大臣

もろ人のあはれとおもふらくおもしとおもひやりしと
まくらふしと紫ありし海のうへにおもしろき
右　朝霞(てうか)　前大納言
雲乃上によきこゑあまたのとりのさへつりて
かしこ乃ちらしめたる緑川よる乃しらなみ
判者中にて云
左哥は清く光くゆひしよ侍るおもやかん
思ひよ此にはのいへにかはかうて
ものこてらふおもんせんひをしぬかむあめる
こと侍る八竹たらまた右は清もいふめけれあ

或は海りに待るにはなを猶(ち)おもくおもふやさしき
しゝてあやしき
左方の歌はあはれなるやうなるに侍りて後
らくとやしかやうとくもこゝろ好に長風ふりて
ることにえ歌を送り侍りしてらのたちまちあまたの
く龍(えんえん)をとめくらして方(だんえん)のしまにおさまりて
び鈞(てうえい)ともうるは宮下(だんう)とらくなくえ(ゆく)ぬやく
あまたは天子紙を一しめくして清る愛にこえ
う華くはこまつる宗みくに侍るは仰しく
朝廷(てうてい)乃ためおもしろく神すら侍るにあらしと

いふ文あまりは後しかるなるこれに倭歌一首ならしく
延喜(えんぎ)乃御門みことのりしてこのうたをあつめさせ給ふ延喜
五年よりはじめさせ給ひしなり是より又
以下とも元正に万葉集ありしかば倭歌の中を
志るしけり中うた八同九年みそぢのころ
くよ能く万葉に倭歌あつめしはとし其のまゝよ
めりなる御かどあそばされしと云ふ説あれども
是世まで古今乃序(じよ)にかきたりとひらかなよ
か様りや撰びて倭るは後ろにてうちとりや
とふ愛宕(くもんにく)太政大臣のきみ事をかりしたゞくし

傳る業あるく倭る左り清涼殿(せいりやうでん)乃庭より御位又
伝ふ位ましく袖をはらひつくなるとうたひたりけ
るお後ちのみなく倭よりこのは能はせたる
事あくもとけれは下とみ人てよその花
とそうしくよ後見かや御集ある志わすれぬく伝う
たりてとしいふく歌撰く代の歌乃さへ明(めい)義(ぎ)なく
あまりは歌(こうそい)後とや朝(てう)歌あるとれをたとふ
は大きなる歌乃宮歌撰乃心あたらく伝へるやう
も元正の撰(ぐ)とそう志たるこそのあらたさ
撰(わむい)ばとものある歌志るして今日に伝へりく是

試そう渋されて抄うがそらいでらく二人座す
まづりん儀をや聊りち儀式をも見んとぞたらてん
のたゝりんくくふ浄の物語ひくれ給ふを世語ふ
なら人と難いかくを異しくされりし御ありぬ乃
おくしいさしと經川代まれて忍しくめうへまく然
めかまくたんをいたを聊っする事たちお殊なさ
むりし節會たまりてはむだんをいちを聊かゝるう
やはまぶらゐん紫きのかきゝ沙をもるけまへつよ
る請このゑあくてする乃あく猶あくやして候ひ
ましきれはやと極めかゑん待る一条院正暦乃中

まうしもいちくちぬ聊し神武天皇元年正月
一日うしをら京乃宮やう移徒ありてはじめて候よ
清う物語ひ宇まち紀宇摩志麻治命ゟ祭
とをうへ物るとし日本紀にみえて候ぞ

三番

左　火焼　入道大納言

さやふうし御しいかまにひたきる野乃
ひさしぶりの乃姫さきめくらん哉

右　服部御賛　二位中将

さ川岸のゑ代のたゝりし乃ふりはさしよ

はまつるちんしのもと氷きこえたちたまへん
利志やしてりうく
左奇てとかかるかんけく御重とともくる竪
乃そへやうちいつくこの水るるをや
君乃守成かん兎めし乃ふかはは涼む節風う
まくらあわちくゆふよ御重八さのとよちゃ
亀くえりあわれ君の端なりえしんと宮あや文
むの字あしとやいへ去年の氷をなあかくふて蒸
なおし残る氷乃きち忘の浅わくさよそうとんする
なりあつきさいみさいわれしの寸法に御るかとこ

ほうぶそうしく古例とくへまはる石なとく紙
まゆうや氷池をも余紙をかうれいは布や
たんきのうちにもひいあめのまつりふかくのせ
て御わこふかる春柏冬はへなるる聖代乃志る
なりあかり乃いぬる凶年の志るしくく御重
ハ氷ちとく大かうふかや形にあつたうりや
とほもうく雨つまくぬぐるれらうたもし
ぞさくまつぼたらたらとしとんたくかく
らひ乃ゆんさいふく御るや仁徳天皇の治宮
額田大中彦皇子をもつてきのへこれをささげさせ

錦のあやもちて季(き)のあたにはれをかくさしめらく
いかなり氷室(ひむろ)をたくはへしめり
右哥はほうしのたくひにて奥ふかくたくはへつる
ならひにしたかひ禅閤(ぜんかう)の御心(こゝろ)をならしにてやうく
侍しうたのやちよのうちにひやうくひさ
しきを御とみさまかはしくわひうちかされ
ときはにしかやうなれは京は天皇の御
ところ肥後(ひご)の国守(こくしゆ)たかちあるくこの
東をはりくまつりたかやまてこの
禅閤(ぜんかう)にゆうす事へしるるかされたるよし

元日ふきくるしきたるにもちくるたまれは七
日ふきたえくまつるもちみえたる鶴(まなづる)の巣あり
え

四番

左　源時宗(げんじのく)　忠邦朝臣

をれ春のやとのあさひのたかえくう
むめのえたうたすゑにあまさき仲家

右　若方(わかかた)　大蔵卿(おほくらのきやう)

春秋たえく宇なかちえくまつかつらかはる
ふる年のあやもかりこうして萌
初春のやとのあさひかりにゆくえ見る哥ありと

ひとせく侍りしむかしよりこの侍るに
古文孝経より千年のちぞへんたく侍るよし
新中納言の申侍りしは持統天皇の御やかん
源時の家ともいふ摂政関白の家にまかれるか
太臣以下の人たちへなまじひ侍るふ
事のあとたちさきまれる公務にくもある様
じつまんしの容とも申ける様子にて大臣のときや
乃大臣にいと見く侍るもひ侍りしもり
鶴飼のとまらくを興あることに侍る
またこれは後氏乃長者朱器乃御倉とまうす

侍りたりし大臣の家には摂籙乃御倉とて別に立てたる
ところはなきにこの御倉とて侍るなるを
也もし摂籙たりし時はつきんしの御倉のごとくつき
よれる御遊あらくさのさうらふ侍るなり
右まうすとも申すは此の清水寺の辺にて此の井
とてんじく媼が紙をく入りて庵せざるにて造
る河内のみもとの侍るに岳あまれてあさがれ
ひふく先をさきこうして年中此の寺や
そのぞくとなかえ侍るなりこれを年ごとに
かはりき

五番

左　白馬節會(あをむまのせちゑ)　縁阿(えんあ)

まけん紫のくもりかゝらぬあをむまと
ひかへこれをや孫のひたゝるらん

右　視告朔(かうさく)　女房

うけ給はれは乃あしたに見えて百かしこき乃
むかし君あまねかるとやまつり孫ん

新中納言申していはく
左は紫乃衣の孫のひとえをひきいるせける
又たなひきあまたまつる視告朔(かうさく)のえむ(?)ゑん

こゝにつきてやむ文法にまよひらくわかく
侍らんこゝによしさらにしや
正月七日あをむまのせちゑといふ事を雅(たれ)も
見らるれ共さきなまゝ人は中々さまし
中にをよそ見馬は陽(やう)のけものにこそのちの(あと)まで
ものゝかたりあをきれかうつる正月七日あをむまに
とりて縁(えん)ありしのうち君のやこふとさして埋(まい)(ほん)さいとを
のさくといふ文侍るかしらもやされと御馬ハ三七
本一七なる人し是ハ三十を地人まりてさかよし
めんたき(くゑんつい)ん御記(?)をみせえる節會(せちゑ)の儀式(ぎしき)るを

いはゞこの事なれとも世すがらにあらさるは
右視告朔を論し給ふ乃ゆゑはしらす家國乃
義としてこの例ありけるにや論語にいへるは
月ことに朔を廟に告ることにて我朝の義
は百官の朝事を一日ことにさだめて月ことには
天子の御前にまゐられし告朔乃文を
ぶつけなと思ふならひなれとも是を論せしものから
まかせたる事なりしをわるくはいひかたき
むかしの事もかはりて今はなきのみならす世のつねの
事は告朔乃事うちすてて祥る年などを

うしろに風雅をもし子貢が餼羊をひかし
のこしたる我等は乃のこゝろにかなひ有ゝ羊をのく
孔子ものたまひし事なり是はよくあらはし
ぬやうなれとも是との法おほくはなりたるを
さまは視告しらせくるべきことなし
まむらは給ふかくたえさせて家々の手段
とゞめん
白馬節会も天武天皇十年正月七日に宴殿に
おはしまして君臣の儀ありけるが後には
をりふし春やうやうめでたき節会し

仁明天皇の豊楽院にしましまして見給ふと
おり告朔ハ天武天皇五年九月よりはじまり
しかるに告朔なり此日官人班幣ありて一人つゝさき
ころさだまりたまふをまつらせし毎月
朔日なりある事なれとも正月元日と相かさね
また二日に行ふ所なりとなる文字日なとにも
ある事なり後月なとに朔日なる故かうり
さくとよむ也

六番

左　春日祭　僧宗久

春日やまみねのこのまにさすかけもあまくたりし
みもすそ川つたへかる雲乃うへ人ひかる

右　御神楽　殿中将師良

神楽乃のまへをもし給ふその道にことに
きみか代やよろつ代をかさね乃かみあそひ
左　春日祭ハむかしにつく行事ハまつ御祭さたまり
あるは名文を問ふ春日のいか井のまへにおほく行事
ハしやうせうかう弁御つとめ行事とりしきる判者

中書

かたくなるまつりの事ハ御ちかひや御心さかしこまるへし

其日乃御神ハしまさらみかさ山へうつし給
ひし事より神護景雲年中なり其
後官幣をたてまつり給ひし二月一度の
まつりなり
古御斎会ハ大こくてんにおいて正月八日より
十四日まで七日乃あひだ最勝王経をかうぜら
れて朝家をいのらせ給ふことなりこのさや
うにわざ国家鎮護おもむきとあるなり
あまたの人ゝの心をひとつにしてかうせらるゝ
ことハ行幸たまて行ふ事にてうけ給る

今ハ官庁においておこなはるゝとかや
其日のまつりごとハ二月上の亥の日なりけり
給ふの日ちよくしをたて宮中乃中において
つとむ清和天皇貞観元年十一月九日始
まつりの又御斎会ハ天武天皇九年の五月より
宮中および諸国にて金光明経をとかせ給ふ
なるよし見えたりとぞ称徳天皇
延暦二十一年正月最勝王経をかうぜられし
よりこのかた年々式とはなれりとぞ

七書

左　女叙位　　為郡翔臣

春にあふ御門ひらく乃おほ路まゝく

まわりめぐくる錦を披くあらたまくし

右　除目　　新中納言

やまとうた御君乃松さむらあくく見え

めくミはおつる名にしそ春にほまさ

新中納言申しくいわく

左女叙位乃ら錦おほ門まつりめくうちかぬ

色くも年乃名もとあかく小数の年

右除目は御しくまく色さう絡く孫ともまむ和哥

雨乃集行にかしく春乃字試出ひら伯

為りしや御あかる人と奥りひりきさ

左女叙位といひ正月八日女乃位階を定よ給を

事ゆく待る古に年不内侍司乃ひくを

むかし門かくて恐れおもあらゆなの時

はじめ松とく松く武馬乃のあらくかぶまる所

あまたぶ事なろ是八三子式をたふ多らや

中侍ら三子いてよ乃まきら小くある御八家よ

きら傍るみや少しくれ中文を以てうく女叙位

まかるく次又位のくらい井をく孫ふなろきまいはむ

くしらえち格ましなの里歳ゟてんしくて名
乃るいや物く去たる主まいや
右あくゝめしのちゝくとや事右外官とも
とふんを以したち外官右志そうく几作るさ
路らめ弁をあるゝとや中あらか國乃人く張
めしく何官とろ゛あるゝるやうまう川道
作るるや京官乃ちくくとのは泉よ江の諸
司を好んせらるるるる主いめ弁の人乃官を
む孫とし路く被为し
八番

た　御製　家平朝臣
百敷乃えゝれ波よさ君か代の海来りて
たまのきかわもなそひそひうら
右　讃岐守定家　貞世
このたひはぬさもとりあへす手向山の郎
ちりしける乃まゝ君か為さむ月取て
新中納言にも申しくいちく
たのしみの度来りたるのあるかちしあるかく
ゆふまくれきこえ侍るとも右の弁男踊のたん
まやこのくれの何しや君まくらとこそ流ありる思ふ

あひのるくな結ふ始しき所にも侍るめる宮を
まづ河く勝とをつけ給ひ
たみの歳末とやん百官ニゆるしをみつまの末にた
てまほのわの末まとへむじあれかもたらのくさや
きめん毎めかくいはあんつんさへ持さめしまし
名所たかうさ取うゑんぎきみ宮内式たりし
見え侍る
官踏歌言とぞ云は正月十四日男踏歌にあり
侍るを踏ひとつ持こ給ふるれ侍るまた女踏歌の十
六日なるは踏もまた持あふ踏乃人ありし

そむく色々の枝ひろげ源氏乃掲ぐらるぞ
おもて男踏歌の氏にて行けるけにてや
この遊士のこと掲ぐるもとしてもしのもろ
め乃ひろ井のいと深ふを得つるにあまりいを流る
をも持ち給ふとあれ十四日十六日月のころな
また明月に踏歌のきよく残清流し寛に給
而へしこのこれとゆふふ踏歌ともうあふ一の寺乃曲
たまかさしのまくとへつまいふうまにさく徘女め
きこくた所しまさちひるおるたらたらうしたかう
源氏よりいつるもこのまこなり

賭射は天武天皇白鳳二年正月十七日百寮
諸人賭射をさせ給ふ事はじめなりとや勅なりし

九番

左　賭射　　　温堅

あづさゆみいるのほかなるまとゐしてつかまつる
うらあるしも宮にまかるなる

右　内宴　　　宗時朝臣

ちよをかぞふる神乃宮にはくれそのうたや
花をこゝにめぐらしめなるらん

判者しるくつらく

右の内宴を神泉苑におこなはせ給ふ
ことにして行ることなきに花を見月をもてあそぶ
あそびならびに行ひて神泉苑にてのみ行
まことにおもしろき内宴のあそびなりけるを様
ことはり
左はゆみのほうさをうつまてかつあらし
といつものくらべ行をたのしきにおいていつへ
題乃やまとしろたえなる法にて勝負さうや
左のうたはいつの事なる負け勝ちはなし
のゝしりのくゆゑに御判をさだむ中宮た

ゆへ給ふ事ハ礼記にもくはしく侍るとかや
是ハ左右近衛府右大臣左大臣の官府のこと侍り
ときハいかなる所か左右の大将いく人の数しらさる
将軍ハ近衛のくらんとひかく異なりハ出来ぬへく
後は大樹と申奉りけれと其次第ある事
左中将や大樹源氏なりしにもか有るとや
所か有りける事にて天下の大将をも奉り
まつりぬるも也度々の事につきて内侍
とや
右内家より事有内大臣左内仁徳の殿え

くはしき事なり判者かくて去年の冬の頃秋
の月の夜にて神泉苑小野宮の御
むかし御遊ありける事なり内の御かたの
識のもの事ら神も侍りしへ池家宴ありし
こそは神泉苑にて遊ひの中にさるらりや
保元より信西ハのちに修理ハ再く
二年正月十八日豊楽院にて御遊ありしく乃
主申さるはかれしもありや
十番

左　大原野祭　経賢僧都

貴船川こゝやふかきに神まつるすゞしめやをる
ちやうきをつゝしみ祝詞をとなへ

右　祈年祭　秀長朝臣

いのるぞよ神のみのりのたなつもの紙
これは左をかちと乃神やしろしめすらん
新年祭は左右ともにとかく神祇官
太政乃官にをかりてはらへと侍るも
判持といふべきなり
左は大原野のまつり二月と十一月毎度上卯

卯日ならば別に志をいはらで侍る歌なれば心尽しくる
去る事さいはひのみやのまつり語らんとするは春日
の御神志やうを祈るといへり歌のこゝろをよくわきまへ
しるべくまつる歌なればこれは大原野祭なり
昔ひろめける中事なり仁寿元年二月より
しめくだして神事たり大祀中
祀小祀とて年ある一月乃神事をもて大祀とし
なつ三日乃神事を以て中祀とし一日乃神事を
小祀とするもやはりまつりさん小祀にしてなりや
昔よりこれにいひしまつりは大神宮以下三千七百三

十二座乃神をまつりて年災といふ事をさだめて
ゆへよろしくえひきたまへるにやとしてひろ
祭月ある事毎度新嘗を申けるまつりなく
國乃大事にや侍るなれば天武天皇四年二月
よりはじめてまつりこひのまつりあり

十一番

左　　旬　　殿中将

百敷人今宵流るゝ神もりかまふるらん

たまふ雨やさし乃かせそとのゝけき
右
平野祭に　　二位中将

さつきに卯月やあらん山人や
ひとつ乃ことあまた雨ふり浦しせり
左歌はまへにあやふさの風をも乃きをしく侍る
始ぞひめづらしきにはひ乃あらはさへ侍り
たゞし毎年さくらを祭にいひしめうさくらん
しるし侍るに擬様なりきし判者さらに中
左歌は祇園下の絲にかく紫乃あら絲た
侍る人はまや旬と申はきぬうきの乃まつかりて
あのさきに絲にきたらえは四月一日九月旬の事
かく侍る百敷文を乃みあひとたてらるゝあれ

御酒(みき)をたてまつりしとぞ今もかく申なる旬
ゆゑよしく乃義ありて内裏(だいり)へまゐらせて
ら神をあがめしてんでんりや祭おこし
まづ代新嘗乃旬とし位よ後にも世祭の内
まことの旬にて元慶(ぐわんぎやう)乃旬とし申や
此日乃旬よ此のはじめてよろしく例なりけり
ちかくなかむさしのとくうきよろしかるべう
なかなかりけりや
右 平野(ひらの)のまつりをするしこゝろもしら山へとへ
まゐりけるうつせみ人のかはりとて覚え侍る(は)

平野の祭ハ四月上乃申(さる)九日にはじまりしとぞ
延暦(えんりやく)年中より始りまつるといへるに
貞観(ぢやうぐわん)ハよもすがらのまつりの時より寛和
元年正月十日よりはじめられしとぞ
十二番
左 松尾祭(まつのをまつり) 貞世(さだよ)
梅の花さきまつ川乃松山乃あかずもひらくさ
いくちよを経ても宮居はつきせざらん
右 梅宮祭 秀長朝臣(ひでながあそん)
神まつるうつきのさかきはかはらでぞ

むめのかや井よりあつかり御幣

左まれ乃お右むめ乃かやあかひかとりけさう手

とし侍る歌ハ清書にあらす侍らしと侍る

めりかてさうし　判者申き

左松尾乃まつりにハしるしあつくも侍りしに

右むめのみやのかミも宮寺とのひく大臣のくわん

まつりより侍りしあらぬかへ侍りしと橘氏

乃人卿氏神ならくまつる社にて松尾乃

御つかさ大宝元年より秦乃都理といふ人

はしめて神殿にたまはりまつるとかや大山

咋神の御事なりとう為になりまつりぬ

貞観年中よりまつり橘宮の御祖師兄

公といふ井まろ尾し給ふをたちまち氏神

祖神たりしま給ふハ義承乃御給なりし

まう承延よりはしこともあへれるなら

十三番

左　大神宮参　宗信法眼

わか君乃見やかやさしくれむいのるりしき

杉かものみ神乃まつりたれなりさうら

右　灌仏　新中納言

さればうの月乃まつりを加へて神も
ほとけもひとしく貴乃まつりに見立られたるさ
歌の趣ハさもあるべき
右ハくわん佛の日の綾をもつて抑へつゝ記
やうやう綾まで六右播磨さあらしや侍る紙左も
抑やうの心へ申しはいかにと申侍りて古説
生る灌佛同じやうに播磨の古書
右大神の中にてはさつる別乃あるを定めたり
灌佛を抑へるものむしまれ綾なすその天鼓あくまで
色かく水をそへて貴の侍るを定めやさまにて見へ侍る

そうしきさゆきとも色ならずれうめでたく佛よる
ばかり弱なるよけ佛生のさかさるれて灌佛
を一乃ふとはれその抑かえたる色か
大神といふ事ハ三輪の大明神乃ことなり大物主
神をいふ井なりと云
灌佛ハ推古天皇乃御時より初まると云

十四番

右　賀茂祭　　　越河

神山乃あふひをかけてくたり世をつく
乃こゝろさしも深ければ抑やらまん

右　三枝祭（さいくさのまつり）　入道大納言

宮人乃今日乃三枝乃花かつら奉るや
かミの社へ入りて御酒（みき）そそくなり　判

左のこゝろ桜乃所しおとろへ海く侍らし
新中納言やつ侍りしにこの池ゑ参るの史の所し
とり給ふやとさるこあるしよむかきし式部（ぶ）
多くの人さしみ社まつるゝ多めりかと侍らよし
此日乃祭よ神代より有とや見えさうて記
二條中将所望し待まつ右に奥ありよし
判者もやまと右歌を猶かく酒猶そゆき

歌とミ乃文り侍るなをえらしてなれそまく
御さきあらぬかくちとさうてあるの
左の歌花乃御まつら乃あら欽明天皇の御時より
めく歌毎日乃祭りしにさ延喜式（えんぎ）つき神社を神とむ
むかし其乃神事侍りしより今日人てあるひ
所は祝をかくてある下加茂氏ま玉依姫（たまよりひめ）と下
毒加大家建角身命（たけつぬみのみこと）乃むすめなりあるとある
せとの小川乃ほとりよりあそひ給へり河上より流ぬ
丹塗矢一すち流れ来る玉依姫（たまよりひめ）このやをとりく
家の乃床にさしおきたまひしむまれたりしくわと

きくちらみえく男子をさむらひ神ともまたまとたまひ
ともまし縁ばかりかしれ見ありけるおもしろく
覚くるんちう又まさせらるとへ宮れとも見えさりつき
ともらくふきげくえりのかゝる別當命下これは
右ニ平川乃たけし猿めくく三枝参ふ侍るまし神猿
今おもての筋ちれむすちれぬと又あるはよく及ばれ
二枝乃中に古今乃肥後跡ありけるかもいとめて
よくやさし二枝乃花とのみにきこえ二猿宮参るの
四手り八画ひ持まとも侍らざる事にて
ありし

十五番
左　又四郎云　澄賢僧都
えさきたる宮の幸乃毎めもくやあやめ草
むね川にかゝる日をひくらん
右　猿射　女房
いくへ宮あやめ乃かつらまつりけり
今日乃ゆきかひもゆや入まし
左哥の二未舞あやめ猿なるらんや
右哥あやめ乃かゝる日まとくらむ宮乃
きゆき猿ひきくや入まし時ありあき猿

めでこそ侍れ又は勝負をさへし判者の作し
かくてたえぬやあるらんなどいへりかくお
とゞめられ侍りき
左五月せちの名のむかしは五日宴会を禁(たんごえ)ほどこさせし
今は曲水のえんかはりてや左右近衛(さうのゑんゑ)府(さう)のあや
めの名ある海ともなれる文あやめの名ありしよくみん
たんぎりかつなぞらへて侍るなり
右あやめは古今(こきん)もあるに見えずむかしものがたりにあり
うゑたむかしの物語ゆゑにあやめ五月五日
豊楽院(ぶらくゐん)をかくむりしたのあやめとゆゑと御後へせし

なりにけり神なき馬弓(むまゆみ)とていふて手結馬のあやめ
あやめの板にあやめありて今の家あやめし
あやめのむかし板を海の後はかくやいへと思ひある
重ねて侍る
十六番
左　　済世勝楽(さいせいしようらく)　　内大臣
さつきやあやめ月のあやめのつまてゐくも
いのちのつまてあやめの名の母(はゝ)ゆゑん
右　　瞬給(まんきう)　　嗣長(つぎなが)朝臣
いつしかあやめのむかしのあやめかゝる所と

めくミの露たきゝやくらん

左さいせうかうの巾のたゝ袖や

右そよくミの露るとやさし肴やうちまつも

足なる洋ゟんあるうしとわもくかちきまる人さ

よしとん〳〵や中寿

宰相講森も一条院乃御学よろしつめく清

涼殿あり〳〵ひせうとらさやうを證きくれし

まや後来薩院乃清紀まやきやうあん甚

宝大王道場り学んせさ購講乃勧ゟ六宝は

天王乃産統あり神徳なを海ほしんとんぜうず

たゞりまなりけり

宮娘給とくいゐしらも付きたる民より来

塩ならぬ紙ふたつ東中の隆理をとまりく

抵挑遣使まる海るもく乾くぬく米塩乃

くんそんあぶ中東の御るなり大路陣たまま

ゆまゝ書ある数ゑくあおこる之それ名月甚

まするか

十七番

た　献醴酒（たてまつるこざけを）

前大納言

貴子代もきそしきこそれ香ん六月甚

宇治乃こさけも見ら海りく

右　施米（せまい）　守長

六月乃宇治ふかうるのく志ら神かしら
見らめくこれおさの思ひくハ

新中納言やて以く

左方の歌ハ以ふのこゝろすれハ思ひ出ふ夕暮をあるやうふかくおもひを流しく侍らむ右も施米（せまい）乃ハやう　かハらましよたかひふ乃こさけ末のおもむきやと覚へく宇治（さく）の中ふ右醍醐（こけ）と武（しき）乃文り侍りますハ以佐らす

さけなる人しむけしを中に米紙かしゆく一束と見く酒を流してありや七月晦日まで毎日ふる事紙おちくまゐる藤袖（なうもん）こて皇嘉御ふ拾うらむしもまゐらる

右施米（せまい）をたすくる武乃山寺の法師ならんよ経をかゞ之法ゝ思ふゝ施ふる事しきハなきうやお神も大臣たちふかくらしまゐらくさうめとさ侍る事すり侍ら

十八番

左　大祓（おほはらへ）　大蔵卿（おほくらのきやう）

たなばた乃あさの大ぬさとらるゝく
ひく乃ほかにこれをきゝもしも

右　廣瀬龍田祭　宗時朝臣

三日月に青時雨乃ふるゝれぞ川据り
ふもと川男ん神まつるなり

左はた川乃あさの大ぬさとひ志まる揺
うけもちや[illegible]あさの乃ちら二日月まふる
一川乃神まつるとおもひ物たる興あるさ
まさりて勝と成ましくや　判者やゝ

大祓といふは百官朱雀門にあつまりて
さく色紙に[illegible]なり六月晦なれば六月
乃はらへとはかる[illegible]大神ぐんろん一どう
はありまつれる魚をもほかなり鰯臓なよ
どもあり神事なるなつらへ折つきつま
むじ水を清め〇そはら魚あるまあけつり
六月かがみや入りて八台むぐら瀬[illegible]東
まつりおふぬるあさいかし海社やまと
乃国まあつまつり乃日あてむたなり風乃の
難をのぞきて年穀乃ゆたかなる事をいのる
乃ま中に[illegible]や天武天皇四年四月よ

ちぎりおきし日をたなばたよまつらんしるらむ

十九番

左　乞巧奠（きかうでん）　為兼朝臣（ためかねあそん）

きられけるにさゝぐるあさむくるあさがほの

つゆしぬやあすのちぎりたえなん

右　盂蘭盆（うらぼん）　前大納言

すみてとくやとりのはちすもかげをみよ

むかへるはおなじ文月なりけれ

左右たがひにたがふ所なく涙にうかぶ

めづらし気もしまれとも見えぬ所

なんを勝とさしや

右くらの涙さそはるゝあはれもいひしらく

よろしくきこえ侍るは持（ぢ）と定（さだめ）侍るべき

乞巧奠（きかうでん）のことは漢のみかどの時よりはじまり

ゆかりにおきよそほひわかんのうちにも備へて

目蓮（もくれん）尊者の母の餓鬼道におちたるをすくはんとの

ことを仏のすゝめられし経文あり唐（もろこし）にても

り斉明（さいめい）天皇の御時あすかの寺に須弥山（しゆみせん）

像をつくりて盂蘭盆会をまうけられたる

ところもあるはと諸寺にて行はれたる事

なるべし
みむまほしく侍るは、なき人ありしをしのぶなるらん
まやたまのおもかげにたつや、文源氏物語にも見ゆる
そも海とふかきいのちもこれ、まことにやのきみよ
て侍るなりや鎮魂（たましづめ）のまつりと申すものの侍るも
あらぬすがたもあるかなきを神にまうす人のた
ましひをとゞむるすぢにぞ侍るとぞ

二十番

右　捫摸　　　　女房

くらがりてあとらはらひのひそかしさ

こよひのめぐりてのためにやならん

右　祈年穀奉幣（きねんこくほうへい）　大蔵卿

いのりぞしてとしのみのりをおほなゐさるはるの日や
ときはなるしきの乃あそびはじめに
左のうたはしのびあへるしのびにかよひこそ侍らめ
やうのものにかよふ侍らんいはひ海の荒すさ
まじけなく侍り
右のうたのこゝろはたゞ侍りのまつり御へ出で
よしつきう侍りき
左捫摸（もさぐり）とかつるものにはさぐりたるものゝ人など

めしおほせらく七月より相撲節といふ事をおこ
なはしむ天子の御遊覧となりしより紙をとめ
し諸国より力士を召て勝負をさせ給ひしを
勝負のかたきをとりしはりひとといへるなり
されはいまのかりすまひの始なり萬葉集に
相撲使とかゝれたるもこれなり相撲をとる
くらゐあるは相撲司といへる諸国のすまひをめし
つかふ所なり左右の相撲くらゐ大はいり
てかちまけあるをあらそひ又つかひなとくたし
ける事ありとかや

右当二十二社へ御幣をまゐらせて年
穀の豊ならん事を祈り給ひし事いまに相つたへて
その御祈のためなりとそ

二十一番

左　小野篁　温堅

ちるをしむ心のうちをしらせはや

小野篁か家に梅の花ちりたる

右　蝉丸　二位中将

かくれ家にしのひしかとも紙につくりあ

ひしその時にぞたえまつるなり

左方小野ゝまゐらせたまひたまふとも
右の人もいしこきを大学寮の所にて
いれんことをわらくりくかむ侍る人さま
しなんしやうなる
左小野の御神の侍する人とおもはれける中
みく侍まゐらせ給へしゝもあれはこそ祭
る一条院の御時よりはしめ給ふる右釈奠と
いふは先聖先師孔子をむね子弟田をまつるたり大学
寮より清穀と世に備へ給ふ祭とつ
たちくしき春秋二月八月の礼奠をたてまつるや

文武天皇大宝元年二月よりはしまるとそ
ひとつまの時とのたまへる孟子やまんさり伯夷は
聖の清なる者也伊尹は聖の任なるもの
なり柳下恵は聖の和なるものなり孔子は
聖の時なるものなりと侍るまてやうれ一方をそなへ
給ふ聖人なれともまことは孔子のやうに時にかなひ
おのつから大聖なるへしとのたまへるなるらむ
まことの大聖を宴していはへる殊に興ありけれ
かしこ侍る

二十二番

左　獻酢　　家井朝臣

まつり場し八月のさけをとりもなく

きこえしを神ならまかんひとつまみ

右　甲斐駒引　　入道大納言

時雨ぬとしらまほしきたへふ拾玉田楽

けさからの庭にとりかゝりけり

左あとのかちのるんだちひよこぬ給ふるにや

右ずいしも海をかねと婦ふ丸を無しまあれ

とをたるちんびあひそり申ふかしく粉ふ座

あさまし人にこそあやまり

ひと綴に紙もしくまつるとのあるさきれぬくかん

ちやくてもえの供具ながんぢやうもけ内裏へ

さゝくまつるの中たまはらけと六神合とまつりき

あはまやなさしも神供たまざ紙中なら駒引を

甲斐のふかさらのこまづけんあさと八月十七日

うつゝにまかりつかはる大宮駒引をて年まで数

百足国くもらぬまつりまやかさらの御馬

三十足今日たくさまつるは宮あんでんよ

お御あんくれ給ふしきるや今は望月の秋

まうけかかるのなしむめ給ひしあるしていはく

猶んぢ紙も沢山に勝也

二十三番

左　宮之考　　嗣長朝臣

あしこゆるかと哉をとえんとハくるゝ丹山
鳴子のゆくゑもしらで君か袖をさそふらむ

右　武蔵野筆　　頓阿

むさし野をまかせしこれのかくつ書へ
かくむしろ紙出し庭そいひつゝ
たまくらのかれぬるもんにかくれ待るに
やまかけのほとゝきすひかくし

右むさし野をむしろにの庭紙よ様くる
いさ海もあらぬ路に思ひ待るに遠近
庭とさし　つゝきに宮の中世
左宮之考とのへるまへむしに結ひとる乃く井
ともなかへるてうにのうかう持らとこゝろひ
てらきんあやく紙路ひるつなら精敏令る
まあらんれあるせわ塗れ名格勤たるゝ
ありまくらまん心やく紙も路ひまうたすわび
人くとゐくひわしくるまんあやくをさうる先ん
待る紙宮之考とかしなりけれしのに宮之考やし

かくのごとく仕まつるも久しき海に光明（くわうみやう）をてらし侍り
あまりも叡感ある事の侍るにや
右八月十六日むさし乃駒ひき乃事をしるし侍る
まや大かた武蔵（むさし）乃國よりいでたる殿（?）の御馬
二十疋上野（かうづけ）の諸馬（?）四十疋あはせて御むまを
五疋奉らしになる也

二十四番

左　放生会（はうじやうゑ）　新中納言

世にかくれなく法の池に放つ身もたえぬ（?）ためしや
いつまで（?）絶えぬ八幡神乃めぐみなりけり（?）

右　信濃勅旨駒引（しなののちよくしのこまひき）　宗（?）かん

ひきまけてなほやまたてしあら駒も
見えたる神の御心にゆるさざりけん（?）

左方清（?）にいかなる身もなくいさみの事多（?）なり
右の駒ひきはあたらしく一同（?）にして也

右の哥をやさしあはれにゆかりにて（?）
侍るよし衆議（?）にも申てよき持（ぢ）にさだむ（?）
まゐらする

左八月十五日石清水八幡乃御神事なり放生会
あまたの海（?）くわんぜん（?）侍まつることなる事

なからよりあかくおもふもしやさんかいぬとくへきいさなはれ
とある川にちかひたちおやうちのいはんとさまし
らる流長者流水其池奥乃事にあられ
うみにかりや神功皇后新羅をせめ給ひける
時乃御ちかひなりけるいましをる中給ふ事あるよや
右は八月十五日志かの乃ひとしのま紀乃むかしをた
くまはまならひをかやの見ゆまれを此中かく
給ふふや六十丈乃よし尺し給ふ事のかたくる書
ゐるらゆ魚とく月日もとぐもこころむらまいるなくあ
國ふら御馬数百疋まつるまゐらく給ふに

いにしへよりとまり事おそるまいかくし

二十五番

左　上野輝川　宗祇法眼

かはつ川音やむしもきこえさへわけきの
かけてみる月乃光もおなしよりけり

右　亭子御讀經　敦中将

ちとせまでかはらぬかげやあらはれて
みつかきのしのちのまつしたなりけり
たくさ津川とのすかたのかけふかきをとくへ
見ぬる月乃さやかやうきのやうりやみし給ふ

出来ばへのなんか露しらぬ待まちくるいまや
もろこしの人にいひはやすみそかひ
判者やかり
左見もし上野乃広き風俗乃名乃八月十四日も
ひくるゝおもむきいふに以前乃中侍らぬ
右の歌は茶のこゝろまいりやうとくくたちんのやうにや
と春秋もしもあはれくらせるもつともるにや
引茶とく備り茶をもちふれたるさ神へは茶は
むかしより我尾茶湯をとくぬし神ふるものより
てありし茶持つ大内山を茶園たりと侍るも

中比梅尾何上人とやらん茶乃ことを露ちり世
知る所しかれひとへまかく侍るを其國
史乃いふ文字十七年九月辛城乃井を
備ふ百人をもつやうだく大ちんのやうにやまきそとよ
ものしむとして貞観乃頃より年毎に行ことに
おのれまさるるものとしにや

二十六番

左　御燈　貞世

たちむかひ見るともしびの光りは海のかけ
も孫かくれあさのともし火

右　不堪田蓑人　女房

こ乃姫みこの町がんさうし孫なれく
波くゝりまちしぬ塚かつ本もなし
たゞ斎院の夜中まで仰られし一とうにしあそび
しそん亀り

右も官蓑のんきし一の事ニハ申斗御まへ
しきより判者申仰られしかどもも勝たる
とし給ひ哥
御姫宮ハ天子の小宸ありころし中人も事のかるべ
事なれ今ハ美義のゐえくだらし小庵自の

霊巌寺とのゝおほくぬれきぬさみて火ぱ
らもしく小宸を供をまゐらせたまわ
右はつるにぬしなき庵のそろく拝しく
たくまつりし神ぞうまれ清勝くそせひ
とこるかるじゆるし給ふす乃あそばるわ
おそしく不志をくしわつぶ清弟とぬきくまつ
清まつし大臣陣よまいらくさそあゆしなわ
あまうくにせてさやうし給ふしたわ

二十七番
左　重陽宴　内大臣

菊くさみちわけてむかへてつく
うつろふなるらんのさかり哉

右　例幣(れいへい)　季吟

たつ月やなをくる幣(いささて)もいせのうち
ところの志つもふる宇やとかなん
右守禄は兆興(いと)を全にふり河とめかく
志らいおもふは深く侍らん
右も深きくずし不その志も御ふり弟そ
色くるたらわかくる様しく仕まつる儀(ちやう)
労(きう)たりしよく持(だ)らん

左九月九日節会(せちゑ)は久く絶えて六義の花の色れ
をわくる道も久なりぬ此字重陽(ちやうやう)とは九の字を
陽数(やうすう)なるによりて易(えき)経にも九月を陽
九といひ重陽(ちやうやう)といふなり詩にもかゝせ給ふ
いと面白き事なり今日ぐん志んに
ひざを給ふ事ためしあるやなくべく三十
月乃宴にてひさく給ふ為ご節会(ごちゑ)
まもたゆし有事けりや
右九月十一日例幣(れいへい)とて伊勢(いせ)大神宮(だいじんぐう)へ幣(へい)
をたてまつる給ふも絶あるなりけるこ

とのまゝにてこそかやうの義侍らぬなりけりとて

二十八番

左　擬虫　　忠教朝臣

いろくさのすゝむしのかひなきむしとこそや人ぞな

きれなる山の紙みえさらくりたる物か

右　十月更衣　　為邦朝臣

たちよらば雨露ものらぬところもよし紙

はりてこそあらまほしけれ紙の衣

左ぬしの心なり夜おちらぬくさはめく

むし紙とかや侍るなんぜうすめらへ絵よの

し侍る事にて右者の夜の人ととめかりける

為題にも侍るややもよくみちてなかるを

紛しく神よりももとおしく紫も中らさん

なかるにも又しらるに定めやゝ勝

左擬虫といへる事ちとあれなるおもしるる

るけまとも殿のせうとしとくみそえ人とる

おそひとく浅野なとへむらくしむし義よ

むしとえてひ入としまつかくれ持ちて

ちきことにて侍る秋乃題乃中にかくさん

もんなるなり

右くゝ十月乃出[?]もくさん年中[?]ちのさいく
よそへん八得てをと

二十九番

左　射場始（ゆみはじめ）　二位中将

名乃ミ虫の宇[?]ふのまゝ[?]あ乃射遊（いむしろ）を
いまそむかしともふしのふ[?]郎

右　維摩会（ゆいまゑ）　新中納言

たまふしは生活之人しもての活乃[?]
やまかくるしく[?]しくて[?]もくく
たいむしろめつしま[?]行るゝ[?]志[?]

のふと行るおくそ乃活ゆひおすれはふかし
ゝ来りしきんれあやかにれつきりく右乃ゆひはゑ
やまおはきゝめて移るは
左射場（ゆみとり）むしろを魚しく弓の弓場（ゆみば）始（しそ）よりせ給ひ
弓ひくゆゝ紙御[?]紙もゝ行なるゝ御（くぶやう）以下そく
多ゆおくむ主ゝ紙の名ゝ歌らそくれとなそれハ
たかくまへのくずんれとれ多るへしゆがむさう
顔をふく深きくゆゝいるの方ゝこのよるも行
人もとくなそまや射（い）むしろ絹をうるま八大事
ゆゝ紙の[?]名をさまし礼記（らいき）まであらはされ

そし給ふ事なり
右なるうたの山階寺ふかく十日より十六日まて
いとなまるゝ七ヶ日なる維摩講をなむ修せらるゝ
むかし大織冠ひやうきのとき百済国の法
明比丘尼といへるか御まくらにさふらひて
維摩経をよみたてまつりしより御なやみ
をこたらせたまひしかはこれより此会を
はしめおかれしとそ此まつりの時なる
やまとの国のかみなるらうそうをあつめ
やまひをさりて世の大事をも

をこなひたまひしよりはしめおこりし事なり
ゆかりある事はたゝ物のことはりをしる
三十番
左　　吉田祭　　直盛
ころも手にやまとのかみの
まつりぬる月のうちの神まつりせの
右　五節　　経賢僧都
あめつちもかはるなる雲をつかく
月かけをそらぬ雲もかゝらち
たちかへる空をみつゝみしのみかんさもれ

侍り海ふしくに女かん乃野ひぐるさゝよしとて

持

右もおしなへ乃ちるくるかんかの乃ひろきに侍りき

とも永承四年の哥合にも喜良山のよ

めらむ哥のいろくに高き祇はくまさく覺ささ

こゝある神に侍れ共しもの神まつりた宮

なく鋳とたわきき

たのしみのみふきゝ喜良とりのハの神なくま

しはもなゆあり乃ちとして妙るも侍らめ

右よ哥とやしもきこえゆるのそ宴よし妙の

こやの海しぐれし時天女あまくだりくることの

一急さらむしく立しめハ神代ぬしくまかくおの

さうらふ神女五節乃ふしあたなりや

三十一番

左　新嘗會　顕家

いねつむ稲かきあけしいなつむもねぐしく

うしゆくころたまかけしめたまわらまつり

右　豊明節會　藴堅

あいたるめや米の乃らんやおさめとみる

まふみさたまりふくるもまかう人々

左右は律まへを杉さあらそけるまとつかのまつ猶
いまたくせうまりかたきれはやと猶しをき持るり
よし判ちかし
新嘗會とまうすなるよしのまつり猶ちを神にた
てまつる物なふたつの代のはしめなるに大嘗
會といひやかしおとのまいは新嘗會とやかたるる
用明天皇二年四月にはしまりとそ
右豊明節會とまうすなるよしの猶ちを神にす
てまつりてのち君も臣にしめし給ふなる
猶は貴きにまします也杉かまさそせ

とよのあかりとなつけしく節會乃名なれはにや
かちとすへきにやあらむ六百番乃うたを勝
合にかへさることこそあはれに事なれ

三十二番

左　賀茂臨時祭　僧宗久

ちはやふるかもの川の瀬々山あゐの
袖かけていくよの中絶さらなん

右　月次祭　宗時朝臣

なか川乃くまとほしれる月かけの
くもりなきよしのくさきよ幣帛

たつ山あひ乃神をおかみしより宮まゐられ給まてこそ
神ともいはひ奉りたまふなりけるとの
しへくしや事
右文乃御としの頃ほとに給まひて二度の月
たひのまつりとなんあまし給まふ此神令
合ふるとも給まはまうねの奉らうやうく
まう給ふ也
左加茂乃くんしのまつり乃事宇多乃帝に
ませ主侍従とやいひし給ふとはしまうれし給ひける
り大明神とむしはひくりしんへのまつりとを

給ふ御さまし中侍まつりとれさとあやうの
御きみ給しまと思ひて人中の殿給へてと中侍ま
く神なと中御さやうあれくいふたわとくやうく
あらし労給ひ御かれてある事の御林
よ帝侍り侍る労給ひよ宮れし寛平年
中よま給ひゐくまつせ給ふ事人之訳
つきよゐの中なる神まゐる代まうしや給ふもと
右月次乃まつり六月十二月より大神宮へ注幣
とまう労給ふなり

三十三番

左　神ゞ合（ぢんぎあはせ）　入道大納言

故郷のとくしまてはそめかゝるもえきまくら

かくとしぬる秋のとしや志らる苔

右　内侍所（ないしどころ）御神楽　貞世

冬のよのあめふれむかしの袖にあそひ

いまもおもひ出よかしそちこそたるらめ

左神も暁る秋の光は雲まてはれゆく

あはれ

右あめふれむかしの神あそひまゐらせしはゆふ

冬はまことも松尾の場をゆくさかわ歌

神祇合（じんぎあはせ）とみなものまつりこれ神供（じんぐ）とするゝへ

きたむかふことなむかしとて八省中院（はつしやうちうゐん）りとゆき

あはくとかぎる神膳（じんぜん）をそめへ給ひたるかたと

も神祇官（じんぎくわん）なれともにおほくあるまいや

右内侍所（ないしどころ）のとかくる賢所（かしこどころ）あまねくかうしことの神（じん）

宴（えん）あるもののしさうなし

三十四番

左　佛名（ぶつみやう）　女房

清くちしちりきの海とりとりのためふしも

身のわかし身にたなるをこうはし寄

右　荷前(のさき)　宗伯(そうはく)法眼(ほうげん)

ふしあしか荷前乃あと絶てるもひさしく
とりはつて汲身つるはうひなき
古ちる御海をう行乃柏梨(くるし)勇のいふし歴まよ
なるめる伝わるまとれ龍(えん)不し待るさくし判者

中あり
古荷前(のさき)の名おも万葉(まんよう)乃古語(こご)ぬまりあれく
まく座敷よあらさ頌よしおもつかや待
つるしかしも根原す諸乃学(うち)誌つ華し徳
待わ者いるく近幾於凡ゆり

右伝各記十九日より二十一日まて三ケ日の間
三世の諸仏の御名號(みなごう)をとなへて六根乃つみ消さ
せ給ふことなれば寛永亀五年十二月よりはし
まり弘和乃傳をいましてあり貞觀
あれりとも一萬三千仏名忘れ
諸国へ及ちく揃ふまし國史乃記よりみん及
ひ給ひしことありくる事まさや
柏梨(くるし)とふ近衛府乃柏梨乃座よりふみより
御酒(みき)をたまはりて敷ふして勅盃(ちょくはい)乃き
なり柏梨とふ一名頌乃名よりく待るまや

右哥は先皇(せんわう)乃くらゐにましましの折かりて
幣帛(へいはく)をたてまつらせ給ふる

三十五番

左　節折(よおり)　秀長(ひでなが)朝臣

霜さやくこゑけのちよを祷ハおもひかへつく
よそり乃神まつりを伊やさかゆらん

右　追儺(ついな)　内大臣

以弓や毎年一夜に暮ゆく年乃やらん
おにやらひまつりて次第に神をいのるらん
左行の叢風は祓ちらくる乃八重と中

よきのえん作りを右まていかよくかくハ
毎に古今の哥にならべてよりとし絵あり
てまた折毎に判者定へ申しゝ
左哥の節折(よおり)とハ十二月晦日を
主御禮抱を節折(おりのみや)神祇官(じんぎくわん)
ありて年の暮に神の贖物(あがもの)なり
あらためて年の暮に神をまつる
御のや之神代よりつたはりたる神祇乃は
めでたきかな
右追儺(ついなやらい)とハ年中の疫(えやみ)をはらひ
あく鬼をやらひなやむたうとき給

以ても儺を逐ふにくはなかりしぬかと追と
いゝとはなふかりに秋乃事なまとは殿上乃侍臣桃
乃ゆみあしの矢をもて御殿乃かくりをちゝる
故ふをいる也月あるおもしろさはありく紙
きゝてひふたゝくかちく紙に闘むく佐ししく二
十人ちん男ん布衣者のそとのを闘
裏乃宮門をめくらなりけふ出雲二年くろえ
しきのはとそ

三十三番

左 上谷南敷擂花 肉大良

志く縁しふようてにほひへりしりたさくらそ花
桜ぬ思るすけさの色海さくらよも

右 南面橘花 新井綱ら

もえふるりうへちしのちゆ丸桜もとまり
ちれへちへふかんの佐へなりりすし

左桜ぬなけまえ乃ちゝ滴さ降しよりうえう源
氏物かりの哥と思ふる由ふりけりちゝく
擂へきうし判者やしくえとも右も由ならん
のようしへかしにてるまて桜ふきてあしら秀
南家の擂ちうれなきの事ー別乃さふりくこそ

御うたくしの事みておほくや御うたも捨中
乃歌の末の句ゟ禁秘抄なとにも定めかふの跡
侍まつる御連歌も志るしゆにかくよりハ

三十七番

左　寄清水恋　女房

なる神くの名にやしめらるゝ人も神ならぬ乃
ひとを絶うらみしらぬ川さきのおもひ

右　寄竹生島恋　入道大納言

こゝろをうかぬる雲井の庭の川竹の
ひとよの節もうきくるの中の夢

雲井乃庭の川竹ひとよもみえぬ水きはに
とゞまるうら海士の袖ゟ判者えんやとあり仍う
難ちん
左乃うたは思ふ川のうちみちよ侍りも歌くみちの
おもしろく侍る事乃いはれあるよや右
雲ゐのかさの雲の初にいふ縁をおもしろく
うち入て詠みにたる仍うたやこゝろの中もけ
まさりしふなとも侍りしかバ
なかに清滝の川を神たちの川竹乃節よう勝
御うちには勝ちの志るしなし

三十八番

左　寄嫁菜御飯恋　前大納言

たちそひてくみのもしほひたくもかしき

ひやもしらしくひかれ行もしらす

右　寄朝餉恋　家尹朝臣

なかめやるそらにおもかけそひて

まことなきつまのおもひをかくしらせ

左のひとしきみのたきにもの侍るや

右あさの御まへにおもひとまり侍るかな

嫁菜のみはしきひとつのさかなにて

もみん立かたくも侍らんか

さりとはいかゝ侍らんや

しかのおとこもうへ天子の御膳なるへき

鯛塩なとの御膳のはしのおもひをかけて

なそのくさのひとつまみにやとそおもへる

こ嫁のおもひへとなりてのおもひいかく

ならぬ事なり侍るとかやあさかれ

井とかいふ天子の朝の御膳の右御膳をさらう

を御まへに侍るかなとおもふ

侍るかしや

三十九番

左　寄荻戸恋　頓阿

植をきし萩のとぼそのあきかぜにさそはれがほのおとのきこゆれ

あくがれのうちに萩のはのそよぎしく

右　寄桐葉恋　慶運

きりのはのちりしくまゝにとはれぬをうらみながらも

そよぐひとはゆつろしき人のこゝろかな

左右今のひとのおもふ人のむすびのほにをとめ

あはせ哥の心おもてのしくくらべて勝ち

右萩のはのおとにもきこえつる桐つぼ

のうちにはやうちかへりのふしのおもむき

はやとよみ出されたる哥のこゝろ

ちぎりの心をふかくおもひのこと残さるゝよしなれど

やはらかなり

ちぎりのためにとりかへしのためしをとりてむすびたるや

いつもの心ばへのうちはやせしやうにてむすびのの

ゝうき事のまへにかはりし心をおもひかなしむ

ものいのちのあはれにもやとおもひてたのみの

きり葉のことはりすみ葉はさかりきりのはのことはりを

よう色こきてる萩の桐葉のちりに合せて流

かとりゆやたらへて雑食なかしやうよ持なり
らうまん中ゆくいちいさき勢なり

四十番

左　喜撰法師　轄叢

ゆふし庵のいほくろの人をわりあかく
あく縁かくとのかを持ちらひ字まんかも

右　紫式部　女房

夜ふるの波にもちらつゆうせん
ちよまふ神よあまつなかくに在
たつおし庵のいほり乃人とんなしつ不の家入

のあらし波や後撰乃せんじやいうれき人ん
てあまた六歌仙のいうとや人待ちつ哉
右ちもちまふかあるりの夜深のるともなよ
ひくゆかし待ま六歌仙さらし判者中なる
なし法かをひきやうしや又ゆら深かいせう
庭うてやなちえとなしと庭ふへて神
待ち宇まつや又夜乃花持もしろりつまうまう
まや中あ縁ちくつくの本うかるまちるなどの
よし琴ひ絃持ふるもちる待まつり

四十一番

た　高梅左黛恋　貞世

いつくしく別れのくしぬれ衣のきを
ものましく花のちる紙乃こりぬ身を
右　高霜の左黛（えんたう）恋二依中ね
人さんなく又きゆくあら紙くちら
衣しもおろかやふくそとらやのきとんす
此書左右（さう）しるとすゆら家ん乃のう上一同さ
れうひ中候まこりや判者（はんじや）も持しるへき
ましさてあかなる
右は源氏物かたり梅このむ乃中宮（ちうぐう）乃いさの

こやみのまつわかく大うてんあくわり衣のう
さ候かしはまいぜんかん亀ときんひわ
つまへむめ津かれさみ衣のしやちひさそ
亀の衣の候かとゆかたしゆかる入梅（むめ）左黛をきよう
らまやあく候はへはらへまへし
えもしと紫の女ちあれまくいもやさしらなくも
え候らえり
右まへこの衣らかんなりの御やあく衣くある
きらんとらめ御てられ衣ゆへし候るらやらん
なりの御かをきうらきやあらひゆしりんるら

乃時ま大ね以下ゑ米次ねまろくおいこうてて見ん
くら紙志色ごしすまるまぐ河なるう見てんなるわ
ろぢんとも中待るゝや

四十二番

左　寿蕪蕪栽意　藴堅

あさちふの庭との法のひのかへるまら紙
雲井乃月そり紙へてうすま門

右　寿酒鱒意　纏賢儒狂

おもふともなき也とたとわりそひ生毎く
とふうかのるうなきひなるう辛まら

左ハ猿ハ源氏物語乃法ぞせんざいのおす
をたのしくどうなしく待わゆふなるとうし
中待るを右ハさんさくの志ら猿も於るし猿狗
うちまへをとく加くて半ハより一位中納言法皇
しハ判者もどうもん有し席しん
左ハ意をんさいさ詞意乃うしかうひ乃まと
なげきそり於わめしく御前の法ぞをんざい
れいろをめ猿乃しさ猿まや天くこの猿くろの
一乃まハ此一名ゆくく待るもてうき猿らし
右ハさんさく中うちハゆいさつせん事中たなり時も

たゞくちのこむさくふとくさぬ殿上口にかくゐ
く名乃つまゆるにや名謁ともらも出給ふことそ
うふふのうちん色あるらしさて

四十三番

左　夜行道　為邦朝臣

ふるふつし何ちゃあらうさめんあくのへや
ちろやのまくらのまはれめくうらうはあをと

右　宣命下　信実

をふむなら人あんくも弁とみさとのま
乃へくあくも彼にくそりしこ夫

左弁にえん云はりゝこのとの井中ふかくちひよ
せく給ふ夜みやさりとて給ふをと
右まるさせる雅たりしや人あうく掲ふ
なりゆたかしやらん
禁中夜行とゝふハ左右の衛府ゑもわうとし
給ふ所ハ左衛ハ将とく右衛兵衛府らく
りゆもゆ給ふるや
右宣命とゝふハ天子の見ことのりを百官に
ふ神あめうしゐて給く人寺乃ゐる所ハ南
宮符をくむろきんこゝやうの事ふかく給ふる

四十四番

左　詔書（せうしよ）　大蔵卿

君かよのためしにけふはこの君の
わか国まうすくふうかしこきこと

右　饗宴　内大臣

萬民乃てしるぬくこともたのしみから
日のもと乃つかひするに伊勢の道

左関白の詔書（せうしよ）左右ともあるさまはよくさたんの
よしわろしにかうかきと綸（りん）乃字ばかりあるに神ちよ
詔書（せうしよ）とてるまへハ一筆もみことのりのまことの

あらたしくせちゑやうを新年にかく侍れ
宣命（せんみやう）を演さしをおほやけのみこともうと
あるそれなり詔書（せうしよ）も打るかにおなじく侍まゐと
もちゐるさきやうをもおなじくそうとくこと
そうもんし可（か）の字（じ）統へるゑ絡へたいさくの
事の志きいつれ侍るたまり
右の饗宴（きやうえん）とやあ天子もみおなしく人えん
きうぐんをとをつしくかんゐくを加う宴う献
うきいそひとやしならは先づゆるくさいゑは
をとやなる

四十五番

左　御元服（げんぷく）　前大納言

君が代は今日ぞ千年とかうぶりの人
まゆをひらけむかしのかげも

右　御賀齢（がれい）　新中納言

百とせの千年のはじめよひの八十ぢに
契りし月は今日をむすぶの千代え成る
たえぬ千世ひもつひにかはらすや古きれ
とし月はかんかへ聞具（ぐ）あるはときもと
よはひくさきめや哥

左はかひ人といひるるを天子乃御元服にて位
とし紀不寿とく理後乃くまやう乃中すに弟
一千年乃人かたえつひとみる銭あるてまつ
らしめ祝詞をあへたむはたちてのあるや
右は御賀大臣の祝たとの徳えせんたう君
中よりのことさかはたずち筆とちれかたとさうし
もちるよりもちとよみの哥

四十六番

左　天文奏（てんもんそう）　宗時朝臣（むねときあそん）

旅ねのまたゆく冬しとふる人さえてかし

君のためとくへえるふひかりかな

右　秋雨（あきのあめ）　僧宗久（そうきう）

あき雲（くも）のちやくちるるひく水のしたに
うつろふものは萩なるとやらさらん

左きいくのひかりあまるそらにあらはれ
侍るもひめ後ちの〓侍る
右あき雲（くも）の水（みづ）のゝ神（かみ）あらはれて
一まつしんあきのすかひまに挑ひ侍まいらせ
らへくおもひ侍る之べきのよし判者（はんじや）申也
右天よ人々ともやうなる志てん生のへ今へやうさう

乃せんしとかうむちらくあめんし西志やう尤
そそくのあるひとの時よりあさけの風雲のゝ雨
もまひみそうのくあらう侍るたれもぞ遅く
ことりぞうきい御堂をたかく事にはくわまらへく
萩（はう）しく桃柄（たうへい）乃なのらんあるさらかしたる右
なくむるうるけきいたら同じうしとやうや
右あまいひとつぞあめ乃御代のうなりたりくく
あまどうひそをも降しるならぬくさん歌しれ
みを見へえ侍るうちろしさのめ神もあると
ぞ我とし侍る

四十七番

左　山雨　　物語

夜毎ごと川ばたむらせのたえまなく
ち海をかくさバいろ乃はれ間なし

右　封事　　女房

来りしなりし流くる紙たよし次第ふ入
なかおやまや天やあらる世もふ年紙
左川ばたむらを世うち入ぬるたびのあか／＼
戦にえ侍り
右たよおおやまや遍ある世なりたび事ひ入るゝ

むかしとかあきらかんきんもいとうし二二貴
かりよまくわく海ゆきうしもんだや空
やすな
左山雨とハつまるき晴をもらるゝひく世露酒
乃神もよんぎしきの山雨乃風しるよいら
毎くまつるなら
右さくせる事もなきをよおし乃まく紙や
もきうるもいかゝ頼んなり侍ら葉きひそく乃
本とくおやまるあ神まそうつ川乃その本に
去にゝ事侍るなりうき様なき御沙汰ハしてまつら

あら紙の紙の神ありとてや又りんこ紙ふつく
あしき紙つかひあまたはまた紙ほしくいさゝめ
やまずも清まりつゝや封(かう)をさらさくまつるかな
あまたなるむべいつは清るべくやうのすゞしき紙
よりまさしく清いとくかくとつくくこそ清き

四十八番

左　恩教(おんけうや)　二位中将

見んちめのうらくしをあへてもゆるしなる
清くある紙をもにをくぬめくゝ紙

右　牛車(ぎつしや)　忠彩朝臣

まねくたまを清めける人たちの色より
うものくる海をりなくいろく葬し
左くうしもあへてもゆるしなき清ゐのめその
敬(や)乃我よかるなくあるなるからまし
人々中将

右を清めける人あんなる乃へと清るちと残ふよ
しあるさ海を清まに打(だ)ちくる色をさり
新中納言之
かんたやといみそめしこそのづくちやそあるゝ紙
とりまむしくちやめんをし清めやゆるしこそのこの

ともあきら代々やちらの御座に御いのりの文
作りてはじめよりかはらぬうた神も
語書乃さきやうとまうだしくはく好る
さ御と申奇まうす様くるや右牛車とは
志酉くら雑くの大臣るまでおれ世んもち八車より
うしをうかいそく中構と出入を御ゆるし

四十九番

左　庚申（かのえさる）　為郁（ためくに）卿

いくやうてなならやとぬりのえさが
あしまけとて夜ねさやかあしくん

右　幾久竹　入道大納言

白神あや二代りもとなしくて井山
寒もめくらん人の露ちまつらんや
左乃えんを御いれ夜の右の色さつりゆうり
くるましても右二代りあるし住山さん
あらはし判者やしく勝て定（さため）くるわ
夜庚申（かうしん）乃勢をニ三ふつかありまく入せんせん
あくおけくしるやさ神し着とてわく縁をん
あくぬ事るれてと変しんのうまて
右も日昇進（しやうしん）の後ちいがのいふ縁ふくめれて

別乃儀なし

五十番

左　輦車（てぐるま）　為邦朝臣（ためくに）

雲井ふもさゝげてかよふつくるまや
まれりひろ御しちるしめぐる莚ゆ

右　大唐商客（たうたうのしやうかく）　女房

云ふくのまかさす明つゝ年あらん
ゆきしもくづろ乃母そゑゆえ移ぬめ
たうしろ海兒よひかるぞたゞおわつまく
ゆゑよ漢まとも志かも年毎りくずくと

つきちら神くちちもとれぬ緑しゝもく漢屋さ
う判（はんじや）ちや漢まえしの丸　給物（きぬもち）よ付侍るや
てちろ海ハ梅のよ寺くちし乃庭ちま花
くろさち好くる母たちるあまてるも侍り照屋さ
ちあくく雑う大臣（だいじん）ましも女御（にようご）りう井がぞのゆ
母侍まてく大内裏（だいり）ちよひ給ふそのたちころ
侍ゆ乃うつちらもびく侍まば給ふる侍まてろよ
源氏のくちちあもち侍るなち
さ絵わしの志安き〳〵かうとやいつを絵わしの梅絲
西國ふ赤わるなりし大寿百海（くさ）などきわぬる

この御うたの御うたあはせなにゝつけてもかしこしや
あら御神ともむかしいまの御ためしかくありく
さいはひの渡てこそまかり渡朝にはしめしたり
神功皇后の新羅をせめさせ給ひしより年
ひさしくつかさのことはりもしかうて持統天皇
まうけの御しるしを給はりしのちこの御代にいたりて
ていわうのあまねく御めぐみをおもひ知りてわたくしのあらはす也、

貞治五年十二月二十日

出座

女房（関白良基公）　内大臣（師良公）

前大納言（今小路良冬公　良基公伯父）　入道大納言（松殿忠嗣卿　法名覚元）

二位中将（四辻善成卿）　新中納言（冷泉為秀卿）

忠頼朝臣（鷹司中将）　為邦朝臣（冷泉右中将　為秀子）

大蔵卿（坊城長綱卿）　家尹朝臣

貞世（今川伊予守）　宗時朝臣（式部大輔）

頭中将（師嗣　良基公息）　秀長朝臣（前少納言）

経賢（梅宮僧都　頼阿子）　蘊堅（武蔵権守　入道）

家隆　羽倒法眼　嗣長朝臣　中務大輔 醫師

守長　丹波守 醫師　兼盛　縫殿頭

頓阿　信名 春鶴　宗久　吉田神主

頼家　表宮亮 勘解由入道　統書増

判者　新中納言為秀卿　加茂判詞

判詞　女房書之

万治巳亥孟秋吉旦

寺町 誓願寺前

西村又左衛門新板

松田本生